

もう少し草花に目を向けてみよう。木もそうだが草花についてはほとんど見分ける知識がなかったのだが、それでも植物図鑑を頼りに日々見ていると何となくわかってくる。なぜかという草花の中には明らかに集団をつくっているものがあり、どんなに節穴であつても目に入ってくるものがあるからだ。

まず目についたのはスミレだつた。最初の年の春だつたと思うが、ヤチダモやミズナラ、ヤナギの木々に囲まれて少しひらけたところがあるのだが、気温が徐々に上がってくると一面丈の低い草が緑色の敷物のようになり、そのうち小さな紫色の花が咲き始めた。木々も葉をつけ始め、その木漏れ日がスミレにスポットライトを当てるようになる。家のあるところからは丁度対角線の角にあたり離れているのだが、そこに行くのが楽しみになる。早々に妻と「すみれヶ原」と名付けた。

次に目についた集団はヨモギだつた。「すみれヶ原」の隣にあつたせいもあるが、特徴的な葉のかたちだし、葉にさわさわと手を触れて鼻に近づけるとヨモギ餅の香りがするのですぐわかる。まあ、その程度ですかと笑われそうだが、色やかたちだけでなく、香りや場合によっては味覚なども使つてなんとか敷地に生えている植物を理解しようとしていたのだ。ヨモギの集団はもう一箇所あるのだが、それを認識するのは少し後になってからだつた。なんせ自分の敷地といつても一面木と草に覆われたところを隅々まで足を運ぶのは結構たいへんなのだ。

ヨモギの集団から先、少し日当たりの良いところに出るとセイタカアワダチソウの集団に出会う。稲穂のようなかたちに黄色い花をつけるので、これは見分けがすぐつく。このセイタカアワダチソウは、根から周りの植物の成長を邪魔する物質を出し勢力を拡大する厄介者らしい。ただ、勢力が拡大しすぎると自分が出す物質で成長が抑えられてしまうという。セイタカアワダチソウを蓄のうちに収穫して乾燥させるとデトックス効果のある入浴剤になるとの情報もあり、最初の年にせっせと刈り取つたせいもあるかもしれないが、三、四年たつた頃には数が減つてきたような気がする。そのかわり増えてきたのがススキである。これも非常にわかりやすいのは良いのだが、セイタカアワダチソウに負けないくらい勢力を拡大する力があつて、あつと言うまにススキが原になつてしまう。

敷地の真ん中あたりは、特に水気が多く分け入るとズブっズブっと足が沈む状態で、木もほとんど生えていない。その中で元気にしていたのはアシとガマだつた。ガマは種の塊である「穂」がお祭りの屋台でみるフランクフルトそっくりなので私でも見分けがつく。この集団が湿地感を高めていたのだが、側溝を復活させ扇状地をつくっていた水をそちらに導くようにしたら急に数が減つてきた。三年ほどたつたら、側溝沿いのわずかに水気が残るところに数本穂をつけるだけになり、その翌年にはまったく目にしなくなつてしまった。それはそれで何か寂し感じになるのは身勝手そのものなのだが。

